# J.G.ズルツァー著『子どもの教育と教授に関する試論（増補第２版）』Ⅶ

上　畑　良　信

## 第８章　心情育成から見たそれぞれの年齢段階における子どもの詳しい教育課題について

（承前）

### 児童期（少年期前半－６歳～10歳）

さて、子どもの時期の第三段階における児童の成長過程についても考察を深めておこう。人がそれまで子どもにどれほど十分な働きかけをしてきたかによって、またはその子の生来の天分の状態によって各人に違いがあるのは当然のことであるが、それでも私はこの年齢期をおおよそ６歳から10歳までと設定しておきたい。人が幼年時代の最初の第一・第二の段階において、上述の通りわれわれの示した手引きに従って乳幼児に働きかけることがうまくできているのなら、この年齢では既に教育の最も困難な部分は乗り超えられ、子どもたちはより意欲的に指導を受けとめるようになっていることであろう。ここでの課題を叙述するにさいして、私は再びこれまでと同じ考察手順に従って筆を進めることにしよう。

この年齢期では、もう既に子どもの身体の運動に取りかかることができる。身体の運動は精神の諸性質に対しても、決して少なくない影響を及ぼす。その練習・訓練は子どもを逞しく、勇敢に、忍耐強く、気丈にし、そして大胆にする。そのうえそれらの運動がきちんと行なわれていれば、心情を豊かにし、内面的に気高くさえしてくれるのである[ii]。

私は身体の運動として踊ること、走ること、跳ぶこと、それに格闘技などを念頭に置いている。確かにこれらの運動の幾らかは、今日のわれわれの生活様式にそぐ

わず、まったく流行（はや）らなくなっていることを私も知っている。そしてその他のものは、私がここで述べてきた意図とはまったく異なるにせよ、子どもたちに親しまれてきている。だが、私の知る限り、昔のペルシアやラケダイモンの場合、こうした運動が教育の主要な部分と見なされていた。そして、すべての知性ある人びとの告白によれば、ペルシアは古代のカンビュセス２世の統治時代、そしてラケダイモンのスパルタでリュクルゴスの法が保たれていた間は、徳性のための最良の学校を設けていた。それゆえに、教育が完全なものであるべきとするなら、教育の重要な一部であるこうした運動は、決してなおざりにされてはいけないものである。そして私が望んでいるような公的な学校が今後開設されるとしたら、すべての学年に身体の運動のために予定された固有の時間枠がなくてはならないだろう。私の生まれ故郷〔ヴィンタートゥール〕では、まだ古き良き慣習が残っていて、すべての学年の子どもたちが年に一度盛大に街に繰り出して彼らの教師の采配によって走ったり、跳んだり、槍投げを行なったりなどをして、その勝利者には毎回褒賞が授けられていた。それだから、これらは私のとても気に入っていた行事なのであった。だが、さらに本音を言うなら、毎年一度の開催でなく、毎週定期的に実施されていたならどれほど嬉しかったことであろう。

ところで、これらの身体の運動においては、主として身体を強くし、疲労に耐え抜かせることを通して、精神自体を我慢強く、気丈に、かつまた勇敢にすること、さらにはその人を名誉心に篤くすることが重要なのであり、こうした本来の目的が達成できるようにそれぞれの練習・訓練は然るべく整えられていなければならない。私がある子どものために踊りの師匠を雇い入れ、彼がその人から立派なお辞儀のし方しか習わず、ただ少しばかりのしなやかな踊りができるようになるだけなら、なるほど子どもは礼儀作法は覚えるだろうが、私が注目しているような主要な目的はそれによっては達成されないのである。私がここで求めている練習は、身体を一段と強めに疲労させるものでなくてはならず、身体の技術と負荷を一層高め、より豊かに発展的応用が可能となるものである。そのためにはさまざまな難しい技術的な足の運びが必要であり、それに合致した運動としては跳躍、撃剣、競走、格闘技などが挙げられる。普通の読者にはこの程度で多すぎることはないと思うので、私はジョン・ロックに倣って子どもらには泳ぎを教えておくことをさらに助言しておきたい(8)。けれども、そのことが理解できるのは、ごくわずかな両親に過ぎないだろうと私は想像する。というのは、子どもが川に飛び込んだなら直ちに死んでしまうだろうと親の多くは思い込んでいるからである。人びとの経験が明確に示してきたように、冷たい水浴がまだ廃れていない国々では子どもがそれによって失

うものは何もなく、ただ得るのは益のみだと考えられているというのに、実に残念なことである。

このような身体の運動に類するものには、あらゆる骨折りを強いる労働的な諸活動がまた挙げられる。それらは身体を鍛錬して強くしてくれるはずであり、暑さ寒さに耐えさせたり、粗末な食事で我慢させたりする習慣を子どもたちに与えてくれる。これらが心情にどのような影響をもたらすかは、既に上述しておいたので繰り返さないが、分別のある人たちであればその重要性を十分に理解できるだろう。だが、何も考えたくない人には何一つ教えることができないのは言うまでもない。彼らは子どもに理性的な教育を施す才覚がないのだから、そんな人のために私は筆を執りたいとは思わないのである。さらに、私がここで身体上の運動や訓練について述べてきたことは、男の子だけでなく女の子にもそのまま該当する内容であると私は理解している。こうした練習・訓練は、男児よりむしろ、女児にこそ必要なことは誰にでも分かるだろう。けれども男児は彼らの活動や生活様式のゆえに、こうしたことへの意欲がはるかに高く、身体をより壮健にする動きを普段から女児以上にしているものである。その意味からしても、女児に対してこうした練習や訓練を取り入れて運動をさらに補うことをしないなら、総じて彼女らはいつまでもそれが欠けたままになってしまう。このような扱いが続くなら、女性は男性よりも、ずっと弱く、ずっと繊細な状態にとどまってしまうだろう。女性が男性の長所を持つ必要はないとしても、その性に定められた天分をよりよく果たすことの必要からも、彼女らが健康で強い身体を持つことは大変有益なことなのである。

この年齢の子どもたちはまた、これまで以上に何にでも取り組める能力を持っているのだから、彼らが秩序と勤労への強い意欲を身につけられるように、大人は一層の熱意をもってそれに向けた配慮をしておかなければならない。子どもたちには今抱えている個々の課業はもとより、一般にすべての仕事において、どれほどそれらが秩序立ってなされるべきかを分かりやすく伝えなければならない。何かの仕事をやり遂げるためには、必要不可欠なものとそうでないものとを、また有益なものとそうでないものとを、そしてまた主要な事柄と二次的な事柄とを明確に区別できるように教えておく必要がある。そして、つねに必要不可欠な事柄をまず第一に考えるべきであり、大事な事柄が重要度の低いものよりも優先して行なわれるべきことを分からせておかなければならない。以前よりも一層秩序を守る力をつけさせるためには、可能ならできるだけ早く、われわれは子どもたちに自分の与えられた仕事に責任を持たせるようにして、仕事内容について規則的に日誌をつけるように促さなくてはならない。日誌への記録ができるようになれば、彼らは必要な事柄に関

する説明を十分に受けた後で、自分の日誌を使って仕事の最重要のところをよく確かめながら、自らの課題を遂行していくことができるのである。

さて、子どもらに仕事を与えて取り組ませる場合に注意しておきたいのは、勤労への意欲を高めさせるために彼らの個々の素質や性向や才能を探り出しておくことである。一般的に言えることとして、余りにも難しすぎたり、余りにも容易すぎたりする仕事は与えないように注意が必要である。前者の場合は子どもに嫌気を起こさせたり、尻込みさせたりするし、後者の場合には、とりわけ頭脳の優れた子を飽きさせてしまう。度を越した苦労を強いるというのでなく、真面目に努力すれば行なうことのできる、そういう仕事をいつでも用意してやらなければならない。そのときには同時に、勤勉の必要性と効用を子どもたちに十分得心させておかなければならない。われわれは勤勉であるように努めることによって、巧みで有能で有為な人物になれることを子どもらに伝えなければならないし、逆にまたいい加減な態度で臨んでいては、大雑把で不器用で役に立たない人間になってしまうことに注意をさせておくべきである。そしてまた、投げやりな姿勢を続けていると、共和国に貢献する人材として使いものにならなくなると戒めておかなければならない。また、子どもらをあれこれと鼓舞するためには、彼らが知っている有名な人の実例を挙げて推奨しておく必要がある。そして、子どもたちが何かを首尾よく立派に行なったときには、彼らと一緒になって喜んでやらなければならない。

次に、この年齢期の子どもにはぼんやりと時間を過ごすことは決してさせないようにすることが大事であり、あるいはまた漫然と暇をもてあますことも極力避けるように気をつけさせるべきである。なぜなら、彼らが余りにも暇をもてあますようだと自堕落になってしまうからであり、ぞんざいな態度になるか、勝手気ままになるか、非常にばかげたことや冒険的なことに容易にはまり込みやすいからである。子どもはこの年齢期では、規則正しい生活を保つために、自らの時間の使い方を次のような配分でうまくやり繰りできなければならない。(1)第一に、少年も少女も、幾らかの時間は諸学・教科の学習に当てること（これまで私は、いつでも男女の別を問わないで語っている)。(2）第二に、幾らかの時間は身体の運動・訓練に当てること。(3）第三に、幾らかの時間は、手仕事に当てること。(4）第四に、幾らかの時間は遊び、仲間の集り、交友に当てること。以上の多方面に時間を上手に割り振ることが求められる。(1）の各教科の学習については既に述べた通りであるし、(2）の身体の運動・訓練についても先に簡単に述べておいた通りである。(3）の手仕事に関しては、女子が従事できる手先を使って行なう仕事がよく知られている。男の子は機械を扱う技術関連のいろいろな活動に取り組むことができるし、木

材ないし真鍮を加工したり、厚紙を細工して箱や家や砦を作ることができる。これらの少年少女たちには、然るべく公的な学校やコレギウムなどにおいて、上述の指導を目的とした教育措置が施される必要があるだろう。

この年齢の児童の仲間社会については、より幼い子どもの仲間関係について上で述べたことに加えて、さらに次のことに留意がなされるべきであろう。それは子どもらが集まるときには、いつでも一定の時間を割いて彼らの果たすべき務めや仕事について話し合いをさせるということである。子どもの話し合いは彼らの活動への意欲を駆り立てることになり、子どもに与えられる各々の課題はそのつど他の仕事と比べて内容が異なるので、このように子ども同士の関わりを活用して他人に後れをとらないように奮起させながら、同時に新しい知識を与えていくことが大切になるのである。

ところで、子どもの善い資質や徳性の一般的、個別的育成の課題に関して言えば、この年齢期ではもはや機械的なやり方をとらなくても、一層分別のあるし方で彼らの心情に働きかけることが可能となっている。この年齢になると、ようやく徳性や義務とは何かについて子どもに語りかけることができるようになる。さしあたり可能な範囲で、大人は少年少女らに徳性の明確な概念を授け、人の善良な性質や善い行為とは何かについて、明瞭な道徳的諸概念を与えるように努めなければならない。そのためのきっかけを、一部は読書を通して、一部は交友関係を活用して与える必要がある。私が上で示しておいたように、大人はこの年齢では子どもと一緒に物語を使って読書を始めるのがよいだろう。美徳や悪徳、善い行為や悪い行為を話題にする場合には、それらの概念を子どもたちに適正にはっきりと示し、そして実例を与えて説明するように努めなければならない。だが、その説明は分かりやすく工夫し、当該の諸概念や経験に合致するように整えられたものにしなければならない。このような機会を活用して、人びとは同時に子どもに美徳を推奨し、悪徳を憎ませるように配慮すべきなのである。友だちとつき合うときにも、大人は彼らに道徳の諸概念が身につく機会を努めて頻繁に設けるべきであり、このようにすれば友人や知人同士で、相互に美徳や悪徳を教えあったりするやり方が可能となる。このような機会をうまく捉えながら、大人は美徳や悪徳の本質と影響とを子どもらに説明してやらなければならない。模範的事例を挙げるときには、そこで紹介する人物が生存している人か、既に亡くなった人かにも注意を払わせるのは必要なことである。

道徳の知識を網羅する系統立った学習は、今はまだ彼らに授けるのは適当でない。児童に対してはいろんなことを少しずつ教えていかなければならない。この年

頃では余りにも子どもじみた童話によるのでなく、大司教フェヌロンの散文的童話のような物語を正確に読んで聞かせたり、あるいはまた有徳な刺激に富んだイソップ寓話を使ったりして、自然で心を打つ題材を称えることによって美徳の大切さを教えるようにしなければならない。他にも、私はこの年齢に合った大変卓出した寓話を探し出しているが、〔チューリヒ西南の村〕クノナウのマイヤー創作の五十の新しい寓話はその一例である(9)。機会のあるごとにこのようなものを話して聞かせてやれば、子どもの記憶にとどまるとともに、彼らの心情にも深く刻み込ませることができるだろう。

また、これらの年齢では、自分や他の子どもたちの事例を通して、理性と徳性がいかに卓越した根源的美質であるかを示してやることが重要である。またこの年齢では、理性と徳性のそれぞれの原理に即して行なわれるすべての事柄が、どれほど秀でた結果をもたらすかを彼らに示してみせることは可能なのである。そのさいに人は、理性と徳性が決して人間によって故意に踏みにじられてはならないもの、二つの侵しがたい神聖な道徳原理であることをしっかりと彼らに気づかせなければならない。逆に、もしもこの自然の法則であり秩序でもある聖なる規範に逆らって何かが行なわれようとし、それを咎(とが)める明確な理由を示してほしいと求める者があるなら、いつでもこのように言わなければならないだろう。「こちらは、理性が許さない事柄である。一方で、あちらは自然の法則が許さない事柄である。人がこのような抜き差しならない状況に置かれたとしたら、誰であっても無理にそれらを侵そうと決して望んではならない。なぜなら、このようにして自然の法則に逆らったり、あるいはまた理性を踏みにじったりすることになれば、必然的にその人は大きな不幸を招かずにおかないからである」、と。

ところで、この年齢期になって、ある程度子どもが自分の頭で考え始めるのが分かったなら、そのときは同時に神、宗教、人間の魂のそれぞれについて、そして人が生きるこの世界の最も重要な根本概念について彼らに教える時期が到来したということである。だが、その場合でも全体の体系をいきなり分からせようとしてはもちろんいけない。というのも、彼らはまだそのための十分な能力を持ちあわせていないからである。これらに関して子どもに教えるすべてのことは、彼らが概ねその種の考え方の少しは自分で思いめぐらすことができると予想される範囲内で、少しずつなされるべきなのである。神様については、「われわれが目にしている万物の事象にこのような秩序を与えている唯一者がそのお方である」という観念によって、概ね伝えることができる。そして、その存在者は季節の変化や植物の生成をつかさどり、そこから生じる恵みの源である太陽を産み出した創造主である、と彼ら

に教えることができる。この偉大な至上者は、人間が役立てられるようにと世界の被造物を、この上なく最上の善意によってお創りになったのであり、そのことを今現に目にしている自然の普遍的秩序を通して子どもに容易に伝えることができるのである。このようにすれば、われわれは神の善意の概念についても子どもたちに明瞭に理解させられるのである。人間の幸せを第一に願われた慈悲深い神は、人間を傷つけ損なう事柄はすべて必然的に善しとされないのだということを、子どもたちはまた知っていなければならない。それだから、悪徳および道徳的無秩序は、この最高の存在者にとって決してお気に召さないものであることを、彼らは推論できなければならない。従って、われわれの有益となるようにいつでもお働きくださるこの上なく善意ある至上者に背を向けたり、その背信のゆえに自らに不幸を招いたりすることのないように身を慎むことは、われわれにとってまさしく最高に理性的で義に適うあり方なのである。こうした観念とともに、人はまた神の摂理についての最初の概念を、子どもたちに授けなければならない。どこまでも計り知れない最上の善意の存在である神が、このようにして事物のすべての秩序をお創りになり、その義をお認めになったことを子どもらは知り、信じなければならないのである。それゆえ、自然界および人間社会のなかで生じうることのすべては、この最高に善意溢れる存在としての神の働き、あるいは義認として理解されなければならないし、たとえすぐにそれに気づくことはないとしても、神の御業によって人間は必ずや恵みを授かるにちがいないという判断に到達できるように、こうした神の摂理から子どもたちを導かなくてはならないのである。加えてまた、同じくこうした神の摂理から、人間は決して運命に逆らって不平を言ったりするのでなく、すべてのことに満足すべきなのであり、この無限に善意なる存在が世界の支配権を掌握されている限り、人間は不幸になってもそのために決して破滅の底にまで沈淪してしまわないというきわめて理性的で正当な道徳的判断ができるように、彼らを導いていかなければならないのである。このような諸概念を人びとは子どもたちに一再ならずきわめて分かりやすく伝えるばかりか、彼らがその意味を十分に心に刻み込めるように働きかけなければならない。とはいえ、その場合であっても、子どもたちが理解できないことまで教えないことが肝心であり、この年齢ではこれを越えて先に踏み込むのはよくないだろうと私は考えている。

さて、次に魂の存在に触れるなら、この世界でそれに直接関わる事柄には人の死の問題がある。この年頃の子が日常において経験する身内の人の死亡のさいに、死とは本来どういうものかを話してやることができる。そして、霊魂が不死であり、それはこの世を超えて生き続けること、来世で幸福でいられるかどうかはその人が

この世でどのように考え、どのように振舞うかしだいであることを、人びとは子どもに話すことができる。それと同時に、その機会に現世では虚栄心を満たすような事柄が、あの世ではもはや意味を持たなくなることを、彼らによく言い聞かすことが必要である。来世では財貨も、贅沢な飲食物も、地位や名誉の肩書も、その他もろもろの事柄にしてもその価値が消えてなくなるのであり、もっぱら人びとに役立つような真理を学びとることだけが、そして美徳と善行だけがそこでは幸福の根拠となるのだと話してやることができる。しかしながら、能力のある子どもにはそのような諸観念の説明は必要であるが、その理解が及ばない子どもにはまだそうする必要はなく、一・二年先に延ばしてやればよいと私は考えている。

この年齢期はまた、個々の子どもの性向と彼らに固有の考え方を探るためにわれわれにとって都合のよい時期である。これらの知識は、子どもを教育する上できわめて欠かせない手段となる。この年齢の子どもでは、彼らをよりよく知れば知るほど、それだけより有効に彼らに働きかけをすることが可能となる。だが、子どもをより一層確実に知るためには、この年齢でつとに称揚されてきた子どもの特性としての正直さ、つまり自己自身と他者とに対する高潔な率直さが日々の習慣づけによって彼らの行動に現れ出てくるように、特に周りの大人は努めて導いてやらなければならない。自分に欠点や過ちがあれば素直に認めることができるように、子どもたちにはよく言い聞かせなければならない。大人は子どもたちが自らの性向と欲求を正直に打ち明けることができるように、十分な気配りをしておかなければならない。そして彼らの会話のなかに、何か不真面目なもの、多くの欠点や不行儀なものを見つけたとしても、すぐに強い調子で叱りつけたりするのでなく、また彼らの誠実で率直であろうとする意欲を損なわせないように気をつけて、温和な調子で微笑みかけてこう言うようにするとよい。「愛するわが子よ。お前がここで行なったこと、またはぜひともやりたかったことは、本当にまったく分別のあることではないのだよ。お前に私が言いたいのは、自分がやりたいことに拘（こだわ）ったあげく今どんな結果になっているかを、よくよく考えてみてほしいのだよ」、と。このようなやり方で、子どもが率直であろうとする意欲を保ち続けられるように大人は支援してやるべきであり、そして偽りのない自己本来の姿と向き合うことができるようにしてやるべきなのである。これとは反対に、大人が厳しく、高飛車に、そして奴隷のように彼らを扱うなら、子どもは偽善的になり、うわべを装い、父母をだまし、目の前に親がいるのといないのとではまったく違った態度をとるようにさえなってしまうのである。

さて、人はまた子どもの思考様式や、秘められた些細な欲求や見過ごしがちな先

入見を見つけるために、いろいろな事柄に関してしばしば彼らの考えを尋ねて確かめてみなければならない。そのためには、子どもが読み、聞き、そして見たことのすべてについて、そのときどきに彼らの考えたことを何か〔帳面や日記〕に書き留めさせなければならない。だが、その折に人が注意しなければならないのは、子どもが自分で思ってもいないようなことを無理に書かせないことであり、人からただ聞いたに過ぎないようなことを、単に真似をして書かないように気をつけさせることである。子どもたちは自らの同類と感じる仲間内では、最も喜んで心を打ち明けるものである。そこでは強制されることもなく、本心を装うこともなく、自分が考えたことを偽らずに語るだろう。だから、子どもたちが何かを書かなければならないとしたら、あたかも自分の仲間に向けて書いているかのように、気負いなく記録させるのがよいのである。それはまた、父母や教師が子どもに向かい合う場合も同じであり、どんなときにも大人同士でするのと同様、わが子や目下の使用人に対してであっても、誠実でこだわりなく友好的に接するように努めるべきなのである。そのことは、われわれが自らの発想を子どもたちの考え方にできる限り近づけようと努力をするときに――つまりは、われわれが物事に関する子どもの諸概念に合わせるように身を低くして彼らと話すときに、そしてまたわれわれが子どもらのなすべきことや、遊びや彼らの欲求に共感しながら関わろうとするときに、それが可能となるのである。そうやって、子どもがあなたがたに対して難なく率直さを示す状態にまでこぎ着けることができたなら、子どもたちの趣好に合った話題について隠しだてなく心が通った書面の交換を、あなたがたは彼らと始めることができるのである。そしてそれが可能になるということは、同時にまたその子が他の子どもらとも書信を交わし始められるときなのである。彼らの書信から、あなたがたはきっと子どもの考え方はもとより、彼らの心情の自然な発露を見いだすであろう。そして、このようにして親や教師は子どもたちを本当に理解すると言えるようになれるのである。

一般に児童に関しては、彼らが年齢を重ねれば重ねるほど、機械的に扱うような対応は少なくしなければならない。少年少女らは徐々に思慮のある人間として善し悪しの根拠に基づいて導きを受け、行動するように促される必要がある。そのような思考方法に彼らを慣れさせるためには、なぜ自分はそうするのか、なぜそう考え、話し、振舞うのか、またそれらをどのような手段で行なうのかについて、たびたびその理由を尋ねて彼らに答えさせるように誘導しなければならない。大人はまた、軽率なままに、そしてよく考えもせずに子どもが何かを話したり、行動したりすることを許してはならない。彼らがうかつなままそうするのに気づいたときには、す

ぐにその場で思慮深い行動を忘れないように彼らに注意を促さなければならない。「お前はいったい何が言いたかったのか、よく考えてみたのだろうか。また何をしたかったのか、初めによく検討してみたのだろうか。思慮分別のある人間は自分が何を話したいのかを前もって熟慮するまで決して口に出したり、実行しようとしたりしないものだ。自分の感覚が命じることを直ちに行なうのは、知能のない動物のやり方と同じである。なぜかと言うと、動物は何も考えたり、推しはかったりできないのだから。しかしながら、それに対して人間は考えるということができるのであり、この一事において動物とはまったく異なるのだよ」、と。そのさいに、人は軽薄さが招いた災厄に関する寓話を幾つか子どもらに語ってやることができる。例えば、マイヤーの寓話にある「知恵が回らないカタツムリ」や、「サルの飼い主だったある靴屋の話」のようなものを。〔そのマイヤーの寓話の一つを紹介しておこう。〕

「サルから屈辱的な辱めを受けた靴屋の主人は、ひどいし方で仕返しをしたいと思い、サルの知恵のなさにつけこむことにしました。サルが考えもなくどんなことでも真似をするのを靴屋は知っていたので、サルのいるところで鋭利なナイフを手に取り、ナイフの背の方で自分の喉の上を二・三回激しく行き来させて見せました。その後で、そのナイフを傍らに置き、その場を離れました。それを見ていたサルは、すぐにそれを真似してみようと思いました。案の定、サルはナイフの刃の方を首に当て、それが鋭く切れることに考えが及ばず、自分の首を切り落としてしまったのでした」。この寓話から思慮の足りない人が一般に理解すべき教訓は、いつでも何かを行なう前に、まず最初によく考えてみなければならないということなのである。

ところで、子どもを思慮深くさせるために父親が子どもに用いてきた次のようなやり方は、私にも大変取り組みやすい方法のように思われる。子どもたちが何か父親に頼みたいときに、願い事を書き記して手渡し、そのさいになぜそう願うのかについて、必ず理由を添えて伝えさせるというやり方がそれである。だが、そのためには先ほど私が述べておいたように、本当の胸の内を子どもらが抵抗なく素直に吐露できるように配慮する賢明さが、大人の側にも求められる。一般にわれわれは、道徳にじかに関わる話題であってもそうでなくても、「それでお前自身はこれについてどのように思うのかな、お前がそれをしてほしいのは、どんな理由からなのかな」、といつでも子どもに尋ねるか、確かめるようにしておくことである。子どもが何かに取りかかるその初っぱなに、こうした問いかけを行なうように大人が心掛けていれば、子どもは徐々に物事の本当の根拠を自覚できるようになることだろう。

子どもたちに判断の根拠を意識づけて理知的に行動するように導こうとする場合、彼らが心から納得するように気をつけるべきであり、自分自身の感情と人びとが共有する共通感覚とに照らし合わせて、その理由づけを深く得心させるように留意すべきである。そうでないと、世間の人が子どもに語って聞かせる程度の内容で、少しばかり経験的な論拠を得させたとしても、子どもは自らの行為への本当の確信にまで決して到達しえないからである。

ここまである程度多くのことを述べてきたが、まだ触れておくべき主要な概評が残されている。一般に人びとに受け入れられてきた金言や、道徳上の格言をこの年齢の児童に紹介し、その意味を吟味して説明することは大変有益なことである。そのような格言には、あらゆる民族のもとで長い経験によって確証されてきた、総じて重要な真理が含まれている。例えば、「高慢は凋落に先立つ」（驕れる者は久しからず）などのような格言は、われわれの道徳的知識の最も確かな、そして第一級の道理を教えてくれる。こうした格言を父母や教師は丹念に収集すべきであり、そして短い説話にせよ、物語風の構成にせよ、それらを子どもたちの胸中に刻み込ませることが重要であろう。だが、そのさいには子どもらに人の悟性能力〔経験界に関する知性〕が持つ真の役割、および格言が果たそうとしている本来の使命をよく説明するように心掛けることである。この種のものには、ソロモンの箴言、ベン・シラ(10)の知恵の教え、またその他にもたくさんの格言があり、人はそれらをこの年齢の子どもに読んで聞かせてやるようにすべきであろう。

以上で述べたことのすべては、男児だけでなく女児の場合でも等しく理解しておくべき事項であり、この点は私にとってゆるがせにできない認識となっている。世間の人びとには彼らを同等に扱うことを望ましく思わない意見もあるであろうが、この年齢の少女が男の子がするように課題に取り組み、実際的な事柄に自らの悟性を活かして立ち向かうことは、大変必要なことなのである。いつでも少女たちがそうした専念すべき課題を抱えているようにすれば、粗悪で、無価値で、そして虚栄心の強い観念で自己の心情を満たす暇がなくなるのである。たとえ彼女らがこの年頃に習ったことをすべて忘れてしまうとしても（とはいえ、習ったことを脳裏に確実にとどめさせる手立ては探せば見いだせるであろう）、少女たちが虚しく無駄な事柄をあれこれ考える時間を持たなかったことを挙げるだけでも、彼女たちの心情はより高潔で、より善くなると言うべきだろう。児童期と青春の時期に、総じて不適切で詰まらない事柄でその頭を一杯にさせて悟性を駄目にしてよいとするのなら、そもそも「麗しい」という語を頭に戴く母国語を持つ「女性」（das schöne Geschlecht）に、気高い心情が宿りうるとどうしてその人たちは言うのだろうか

――私には訝しく思われるばかりである。

### 児童期（少年期後半－11歳～14歳）

ここからは子どもの年齢の第四段階の時期について考察しておきたい。この頃になると子どもの成長は目覚ましくなり、自分がどんな人になりたいかについても彼らは一層強い興味を見せ始める。この段階は、おおよそ11歳に始まり14歳までの年齢が該当する。この時期になると、児童たちはもうしつけを半ば終了した、それなりに知力を備えた人間と見なさなければならない。そのため、同時にまた、彼らの教育においては単なる子ども扱いや、機械的な対応はそこまでですべて一区切りをつけるようにしなければならない。これ以後、人びとは徐々に大人に関わるようなし方で、子どもらの指導に着手すべきなのである。私が先に簡潔ながら身体の運動や訓練と秩序について、また勤労意欲と子どもの従事すべき仕事について述べたことのすべてが、ここでも同様に考慮されなければならない。ただ、これらの活動分野では男性の強みが幾らか現れやすいことは、男女間の相違として指摘しておいてよいだろう。それだから、男女の性差については、この点を把握しておけばそれ以上のことは敢えて言及する必要がないものと思われる。

さて、一般に注意を払っておくべきことは、この年齢の児童では、彼らが何をするにせよ、これまで以上に子ども自身に決めさせるようにしなければならないということである。そうすることで、少年少女はだんだんと自己自身を制御することに慣れていく。人びとが朝から晩まで彼らの時間を管理し、どの時間に何をどうすると差配することは、この年齢ではもはやふさわしいやり方ではない。人はまた、あれこれの事柄においてどう行なうべきかを命じることもしてはいけない。そうではなく、子どもたちに一定の自由を与え、そうすることで本当の自分自身が周りからも認められ、より発展していくきっかけが持てるようにしてやるべきなのである。これに反したやり方では、少年少女の本然の持ち前が圧迫されるか抑えつけられるかして、その心情が子どもっぽく、臆病で、下品になるか、あるいはまったく裏表があり、悪意を隠さないものになることであろう。

それゆえに、この年齢の子どもにわれわれが取り組むときに求められる対応の第一の修正は、次第次第に彼らにより多くの自由を与えることである。私はこの命題について然るべき条件をつけて理解したいと考えており、この変更は両親またはその他の指導者が子どものことをよく分かっていて、どの程度まで自由を認めてよいかを十分に承知していることを前提としている。ここで言う自由とは、児童がしたいと望むことに毎日二・三時間、あるいは彼らの年齢がもう少し高いなら四時間程

度の範囲で、その使い方の自由な判断を彼らに任せるということを意味する。だが、それは大人から求めがあるごとに、自分が何をどう行なったかについて報告させるという条件をつけてである。そうすれば、その報告から子どもが傾向としてどんなことを最も行ないがちかが分かり、あわせてまた、その子の本来の性質をよりよく理解する手だてが得られるだろう。こうした認識は、この時期にはますます必要なものとなってくる。彼らがどんな生き方へと方向づけられ、それにふさわしい心構えをしていくべきかに関して、この年頃こそまさに十分に熟慮すべきときだからである。人びとが悪い結果を招き寄せたくないならば、少年少女の持ち前や性向を活かしながら、彼らの将来について見通しをつけておかなければならない。子どもの個々の諸特性に対して人びとは、いわば盗み取るようにさぐりを入れ、そのうえで彼らが何に最も秀でているかを探し出さなければならない。こうした選択を、いつも子どもに任せてしまうことは適切でない。後になれば興味を失うようなことに対して、しばしば子どもは一時的で変わりやすい欲求を示すことがあるし、時が経てばやがてどうでもよくなるような事柄に対して愛着を抱くことがあるものだからである。しかしながら、生き方の選択のように重要な事柄においては、より一層十分な論拠が求められなければならない。ところが〔現実に目を向けてみるに〕、多くの両親をこのように適切で思慮深い熟慮へと導いてくれる指導者がいったいどこに見いだせるであろうか。ともすれば、親自身の関心や好みが、とりわけ共和国では地域の大人の政治が、子どもたちの真の幸福よりも優先させられているのであり、国の公益よりも幅を利かせているのである。後者の子どもの教育のように重要な事柄は、本当は立法者や政府当局の支援を受けて推進される案件であるはずだろうに〔、人びとの願いとの隔たりは大きいのである〕。

第二に、子どもの自由に関しては、それぞれの子どもの性向にあまり過度に制約を加えてはいけないということが重要である。ここで私は、先に論じておいた中間的な性格の傾向性のことを念頭に置いている。それらは、それ自体をとれば善し悪しの裁定になじまないものであるが、状況しだいで善くも悪くも変わりうるような性向である。この時期には子どもの甚だしく性悪な性質は大方もう取り除かれているので、まだそんなに悪くない傾向性は、必要に応じて抑止への歯止めを効かせられる程度にしておけばよい。例えば活気に満ち、情熱的な気質を持つ子どもの場合、仲間友だちとの交友や、演劇とか気晴らしへの強い欲求を示すだろうし、静かに過ごすよりも賑やかな暮らしを好むであろう。こうした性向は上手に適度なものへと緩和させるべきではあるが、しかしそれを大人は抑えつけてしまおうと試みてはならない。われわれが彼らの交友や気晴らしを求める欲求をごく稀にしか認めず、い

つも家に引き留めようと無理強いするなら、こうした強制行為はきっと何も良い結果をもたらさないであろう。確かに若者は一度自由な状態を知ってしまうと、その後ますます羽目を外すことになりやすい。だが、そのような社交好きの傾向性であっても、道徳的表象に訴える理性的な方法によるか、既に私が事例を用いて説明した迂回抑制法〔不愉快な事柄への心理的葛藤を利用する方法〕を用いるかするなら、適度なものに是正していくことができるのである。

第三に、子どもに自由を許容するさいに重要なのは、自分が考えたことや自分のやりたいことを礼儀正しい態度で率直に口に出せるように、大人の側が気をつけて柔軟な対応をしてやることである。私は一人の若者を知っているが、彼は生まれ持った鈍重な性質のために、行儀よく知的に振舞えるように育ってはいなかった。変わり者の彼の父は、息子がよく考えもせず突然思いつきを喋りだすと、叱りつけてこのように言う結構な習慣を持っていた。「どうしてお前はそんなくだらないことを口にするのか。お前はただ黙ってさえいれば、それでよいのだ。お前はてんで何も分かっちゃいないのだから」、云々。こういう処遇によって、この善良な少年はわれわれが普段「一匹のうさぎ」（臆病者）と呼んでいる男になってしまった。彼のような若者が、不正確な判断をして、しばしば同じように口にして話しだすようなら（それも子どもの経験不足や世間に対する知識の乏しさからありがちなことなのである）、われわれは大人のマナーに則って、人として相手を尊重しながらたしなめるようにするのでなければならない。そのような丁寧なやり方をとるなら、少年たちもまた自分に向かってあれこれ言われる忠言でさえも受け入れるようになるのである。子どもとの対話において礼儀に適った自由さを認めるこの種のやり方がもたらす利点については、他にも既に簡単に示しておいたところである。

この年齢では幼年期のすべての主要な過ちはもう既に一掃されてきており、それと同様にまたすべての主要な資質や善い性向もその作付けが終わり、少なくともその成長に必要な良い土壌が準備され、今後の生育を待つ状態になっているはずである。それゆえ、重要なのはそれらの資質や性向を頑健で丈夫なものにすることであり、自然な方法にせよ機械的に内面化を図る方法にせよ、今や獲得した善良な性質に対して子どもたちがその本質や、美しさや、須要な重みを十分なまでに理解するようになることである。そのうえで、親たちの大いなる寛容さに包まれて、彼ら自身が自己の性質を揺るぎなく安定したものにし、一人一人の徳性を深く内面に根ざしたものにすることなのである。そのような教育を目標としてわれわれは、今や少年少女に整った教材を用意してやり、必要な道徳の諸知識を解き明かし、教え始めなければならない。それにはまず第一に、すべての人間の義務ならびに自然界の諸

法則の基礎知識が、彼らに説明されなければならない。人びとは人間的な幸福がどれほどもっぱら自らの行なう行為の道徳的あり方に見合う形で成就するものであるかを、彼らに示さなければならない。このことを人は、世界的知識の広い範囲から、そして哲学の諸論拠から、実例を挙げて伝えなければならない。なぜなら、われわれは人間のすべての根本義務の明瞭な概念を子どもらに与え、そしてそれがいかに自然の普遍の法則によって根拠づけを受けているかを教えなければならないからである。そのうえで、個々の人間の根本義務は、他のすべての事象と深い関連を持っていることを、彼らに明瞭に示さなければならない。すなわち、すべての人間は普遍の自然法則に対していつでも忠実であるほかなく、それへの恭順を受け入れるべきであること、この自然法則への恭順はこの世の他のすべての事柄よりも優先させられるべきこと、われわれの私的な利害や諸欲求は、人間の根本義務に対して全面的に道を譲り、譲歩しなければならないこと、これらのことを子どもらに教えるべきなのである。以上に挙げた根本諸原理は、最大限印象深く少年少女の心に届くように心掛けなければならないし、あらゆる機会に取り上げて伝えるべきものなのである。

そのうえでまた、さらに子どもたちに伝えておかなければならないのは、真の名誉、良心、そして令聞が、人間に授けられるこの上もなく貴重なものであり、それゆえそれらを大切に守り通すために人間は、最大限注意を怠らないように努めなければならないということである。加えてまた、実直さや真の社交性、そして普遍的な人間愛が社会生活にとって欠かせない徳性であること、さらには多数者の幸福をわれわれだけの個人的な関心事よりも優先すべきであること、人びとがそこに生を受けているこの世界全体が万人の生まれついた同等の権利、名誉および地位を約束してくれる唯一の国であるということ、そしてこうした諸原理のすべてを遵守しようとする努力のなかに、人間の真の称揚すべき働きがあるということ、これらのことをわれわれは子どもらに伝えなければならないのである。

さて、若い少年少女に対してこれらのすべての知識を彼らの心情に一層生き生きと印象づけるためには、日々継続した口述による教授か、あるいは読書を通して、道徳的な題材について少なくとも毎日１時間は学習機会を設けるようにしなければならない。そして、そこで習った内容を各自の熟考へと発展させるためには、それに有効な幾らかの練習に取りかからせなければならない。人間は、すべての行為のなかで比類のない最大目的である幸福の願いを持っている。この幸福は、他でもなく非常に多くの二次的・付随的意図が重なり合った状況のなかで達成されるものである。従って、賢明な生活を送るために必要なことは、さまざまな付随的意図を背

景に持つすべての行動が、この主要意図と結びつけられることである。この〔中心と周縁との〕自覚的結合はいつでもわれわれに、適正な目標や指針を教えてくれる。それがなければ、自らの最大目的とは無縁な事柄ばかりに拘泥し、物事の本質からの乖離が起こりやすくなる。従って、若者たちを適切に訓練するためには、彼らに対して道徳的な課題を日々提示して取り組ませるべきなのである。例えば、次のような一定の行動指示を用意する――食事、水の補給、課業、散策、仲間での交友（他にも大人が必要視する項目を簡潔に挙げる）。そこで、彼らがそれをどうやって行なうかを考えさせる。そのさいに人間の最大目的である幸福を高めるにはどうすればよいかを彼らに意識させながら、想定しうる最善の課題達成を求めさせるようにする。もちろん、そこでは幸福を実現する手段について探求させることも大事なことである。ところで、この場合の具体的な手順としては、さまざまな状況を模擬的に設定したうえで、誰か人をそこに配置することにし（その人はいつでも正しい行為を望むものとする）、その主人公が所与の状況下でどのように行動すべきかを子どもたちに考えさせ、結論を導き出させるのである。繰り返しこのような練習に取り組ませる指導によって、結果として必要な〔道徳的〕技量を子どもらにだんだんと身につけさせていくことができるのである。

今やまた、人びとは少年少女たちに、自然宗教と啓示宗教の真の根拠を教えなければならない。われわれは万物の創造主、人間にとっての守護者にして恵みの主である神の真正な概念を子どもたちに与え、同時にまた人間が創造主に対して負う義務を説明してやらなければならない。その義務とは、人間が主に対して崇拝の念を持つこと、愛と感謝の気持ちを抱くこと、そしてとりわけ神の善意への全面的な恭順、ならびに神の父としての配慮に対する幼な子の信頼を揺るぎなきものとすることなのである。人はこれらのすべての教えを、まず第一には、生命が息吹（いぶ）く自然の成り立ちから子どもらに説き明かし、その証左となるものを示してやらなければならない。自然の普遍的秩序のなかに遍く神の叡智と神の人間への配慮や善意とが顕現していることは、その自然の秩序ある生成からきわめて容易に子どもらに理解させることができるだろう。そしてこれらのことをよく理解できる子どもには、自然の道から外れていった人間を再び幸福の道へと回帰させるために、神がどれほど慈悲深くも尋常ならざる御業を用いられたかを、神の啓示を引き合いに出して説き明かさなければならない。すなわち、われわれはご自身の独り子を人類のもとへと遣わされた神に対して、愛と感謝を捧げるべきどれほど深い義務を負っているか、徳を実行して応えるべきどれほど強い義務を負っているかを話して聞かせなければならない。われわれはまた、人間が自らの心情の満足を得るための唯一の確かな基礎

に、他でもなく宗教を据えるにいたった理由をこのようにして子どもたちに示すべきなのである。

だが、この年齢以後になると、少年少女が宗教と道徳哲学から学び知った内容を自らの行ないへとつなげられる努力をつねに怠らずに続けさせなければならない。それには、より頻繁に行なう説諭が役に立つだけでなく、実践すべき美徳の実例をまざまざと感じ取らせてくれる歴史と道徳に関する読書が彼らの導き手となる。それらの模範を威風堂々とした弁才によって紹介し、推奨し褒め称えなければならない。分別があり徳をわきまえた人たちとのつき合いが、この点でまた子どもたちの役に立つ。それゆえ、この年齢の子どもたちを、徐々に成熟した道理の分かる大人たちのいる社会へと導き入れなければならない。こうした大人の社会と出会い、少年少女は非常に多くのことを学んでいく。そのような人びとを通して、彼らは自分が学んできたことの実践事例を観察する。そうして、思慮分別のある生活の可能性、美しさ、そして素晴らしさを実際の範例を通して理解を深めることができるのである。

世の中とそこで暮らす人間についての知識もまた、この時期の少年少女にその最初の初歩を教えておかなければならない大事な領域である。まっ先に人びとは、彼らに人間社会の一般的な外的組織の構成を実際に現存する姿で示して見せなければならない。国家とはなにか、そこにはいかに多種多様な人びとの秩序が存在するか。政治家、兵士、学者、商人、美術家、職人、農民とはそれぞれどのような仕事をする人か。これらのすべての人びとがどのように密接なつながりを持っているか、そして諸身分から構成されるさまざまな人びとの真の称揚すべき働きがどのようにして成り立っているか、等々を。その後で彼らには、人間が善い性質を有している反面、悪い性質も宿していることに気づかせなければならない。それゆえ、大人は少年少女たちが日毎に遭遇する道徳的な出来事について彼らと会話を重ねるようにしなければならないのである。大人は社会のなかへと彼らを導き入れるべきであり、そこで子どもらが目にするのは、喜びや悲しみを日々体験して真剣に、また陽気に暮らしを営む人びとのさまざまな姿なのである。こうした現実の社会と出会うなかで、彼らは自分が見聞きしたあらゆる事柄についていろいろ考えたり、日々生じる出来事を手元の日記に書き留める習慣をつけたりできるように導かれるべきなのである。

### 思春期および青年期（成人への移行期－20歳まで）

さて、われわれは最後に教育の最終段階に当たる青少年期について、幾分簡単に

考察しておこう。私がここで述べておきたい最初の所見は、若い青少年の謙虚さと冷静沈着さに関わる心性についてである。若者が初めて内面に灯された理性の光明に浴して、物事の真実の一面を学び知ったとき、多くの場合、彼らはひどくうぬ惚れてしまい、自分が再度盲目になることはもはや断然なく、何でもよく知っていて不明なことは何もないと思い込みがちになる。自分以外の者は適切な認識手段にたどり着けないでいる一方、自分のみが正しく立派に考えをめぐらすことができると信じてしまうのである。こうした錯覚に陥った若者は空威張りをし、自分の手がらを過信して、頑迷に自己の見解に拘泥するばかりか、他人を蔑み、不遜になり、そして怒りっぽくさえもなる。こうしたことは、物事を習い始めた若者たちが犯しやすいごく普通の悪弊である。それゆえ、これらについては、若者がこうした過ちに陥らないように、彼らと接する人びとが特に気をつけておくようにしなければならない(11)。

ところで、過信やうぬ惚れを招きやすいこれらの悪癖から若者を守るには、どのような手だてが考えられるだろうか。第一に、諸学・教科を教える人たちには、古代のソフィストを真似て同じように決して振舞わないようにしてもらうことである。ソフィストたちはどんなことにも声高に口を出して自説を表明し、そして彼らのみが真理に明るい知恵者であり、その一方で仲間に属さない他の者たちはすべて盲目である、と自らの生徒にうそぶいていた。だが事実に照らして言えば、彼らはすべてを知っていると不遜にも思い込むべきでなかったし、また自らの生徒の問いかけのすべてに、あたかも知らないものはないかのように傲然と答えを返すべきでなかったのである。われわれはそのような高慢で無知な教師に、決して子どもを委ねるようなことをしてはならない。教師はそもそも謙虚な人間でなければならないし、適度に懐疑家ですらなければならない。人間の知識が不完全なものであること、そしてその知識は狭く限られたものであることを見通せる、堅実な思慮深さを彼らは有していなければならない。ある事柄に関する判断にさいして、与えられる条件しだいでいろいろな立論が可能となることをどんな偉大な思想家も知悉しており、むやみに自分の功績を誇ることは危険であるとわきまえているものである。クリスティアン・ヴォルフにしても、ただ彼が単独で立派に思索でき、彼一人のみの慧眼で真理を明らかにできたと人びとは思い込むべきでないのである。それだから、教師においても生徒に自らの下した説明に盲従するように求めてはならない。生徒が自分自身で事柄が分かるようになるまで、たとえ教師であってもじっくりと疑うことを許さなくてはならないのである。

第二に挙げておきたいのは、真理の探究はわれわれが望むときにいつでもすぐに

遂行可能なものでは決してないということであり、この点について若者には再三再四言い聞かせておかなければならないだろう。そしてそのことを彼らに一層確実に納得させるには、彼らが間違った判断をしていると気づいたなら、そのつど次のような知的表象を与えることである――「人びとがどのようにして判断を誤るかを十二分に注意して見ておきなさい。ものの判断は慎重に行なわなければならないのであり、すぐに即断したり、すぐに否定したりしてはいけない。最初にまず、すべての事柄をよく吟味して熟考しなければならない。いとも簡単に真理を見いだせたと思うときには、しばしば誤って判断しているものなのだから」、と。このような戒めを若者には繰り返し与えるべきなのであり、それとともに別の主題に関して異なる論拠を授かった他の若者を蔑んで彼らが話すのを許してはいけないし、大人が不用意に同様の態度をとるのはなおのこと慎まなければならない。もしもそのような振舞いをとってしまうとすれば、若者を誤って導く悪い手本を自らが示して見せているのと同じことになるのだから。

若者が高慢になり、何でも知っているかのように思い込んでしまうなら、彼が容易に答えられないような質問を矢継ぎ早に投げかけ、知力溢れる聡明なハラ―教授(12)を手本にするようにたしなめることは、容易に思いつく対処の方法である。そのような場面に出会ったなら、博士の名を引き合いに出して、「われわれの知識はすべて中途半端なものであり、学問の最初の初歩の段階さえも、まだ依然として越え出てはいないのだ」、と言ってやらなければならない。もとより、われわれは〔教育のための諸条件を整えて〕、これからの若者に学問の歴史の扉を開いてやることは可能なことである。だが、そうだとしても、その探究の歩みがどれほどゆっくり進行するものであるかを教えておくことはとても必要なことなのである。

われわれがここで問題にしている若者の誤謬は、諸学・教科の学習において陥りやすいだけでなく、道徳の育成や、慣習および習慣の形成においても避けがたい弱点となりやすい。彼らが世間という社会へと入り、そこでそれ相応の経験を積むまでは、自らの生活様式やマナー、そして自らの生活習慣こそが最良のものと若者は思い込みがちである。こうした錯覚は、おそらくは後に彼らが異国への旅行に出たときに剥落してしまうものにちがいない。なぜなら、自分たちだけが良い生活習慣を持っている唯一の国民ではないのだし、もっと他に一層分別のある、それゆえに誤った道に迷い込むことが少ない諸国民が多く存在するのだから、広く社会の知識を正しく判断するためにも、長い経験と深い洞察が求められるのだということを、若者には前もってしっかりと伝えておくのが肝要なのである。

加えてまた、この年齢で特に理解が求められる別の側面は、今や思慮深いし方で

育成しておかなくてはならない若者の道徳的趣味についてである。この道徳的趣味の名で私は、偽りに満ちたものや見かけ倒しのものから良心的なものや美しいものを選り分け、前者を嫌悪し後者を愛する人間の能力を理解している。とりわけこの能力は人間の楽しみを求める欲求に根ざしていて、何かの対象に対してその人が抱く愛好心をそれは表している。なるほど一般的に言えば、人は自然的なものや気質的な本性に従って生きていかざるをえない。自分の楽しみを少しばかり孤独な生活や静かな平安に見いだす若者には、騒々しい用事を無理強いすべきではないのであり、ただ彼が自分の性向に過度に執着しないように牽制しておけばそれで足りるのである。反対に、賑やかな生活を愛する者にはいたずらに干渉するべきではなく、ただその性向が度を越して行き過ぎてしまわないように注意して導いてやらなければならない。そして、他の場合でも事情は同様である。さて、今私が念頭に置いている趣味の陶冶とは、若者が彼らの自然本性に背馳（はいち）しない方向で自らの愛着を寄せる事柄に対して誠実に向き合える人間になることを意味している。これに加えて望まれるのは、一般に広く楽しみの享受を人間に与えてきた、すべての物事の自然本来のあり方について十分な理解を深めさせることである。あらゆる楽しみの享受というものが人間にとって自らの内心に従う誠実なものであるべきとするなら、その享受のすべてはわれわれの心の自然本性に偽りなく合致するものであるべきなのである。表面的には道徳的と評される人の性質であっても、そのなかには、しばらくたってわれわれの心情が冷静になったときや、知識が増して事物への洞察が一層高まったときに魅力を失くしてしまう雑多な愛好の傾向性が存在するものである。それだから、そのような性向に根ざしているような事柄は、持続して真の楽しみを見いだすことはできないものとなる。従って、若者たちにはそのような事柄への愛好に価値を求めないか、それに対して少なくとも必要な程度に抑制的に臨むかできるように導いてやらなければならない。この種の性向には、例えば遊び好きな傾向、お世辞を弄する社交、うわべだけの仲間づき合い（例えば、理知的な語らいもほとばしる情熱もそこには感じられない類のつき合い）、そしてわか身への過剰服飾の趣好、等々がある。これらの愛好はすべて、それ自体が悪いことではないにせよ、しかしながら、人がそのために時間と熟考を多大に費やすような目当てとはまったく考えることはできないものであろう。だから、大人は若者たちにこれらの事柄が現実にはどれほど内実を伴わないものかを教えてやらなければならない――つまり、その種の愛好は決して主要関心事とは見なされず、確実に言えるのはただ時間が失われるだけであるということ、分別ある人間の主要な努力は、自分と他人のために着実に便益を生み出し、いつでも知識と知恵を増大させてくれるような事柄に

向けられるべきものであるということ、をである。従って、若者たちがこれらに関して何かの楽しみと趣好を見いだすときには、すぐに彼らに尋ねなければならない。「それは君たちにどのような本物の有益さをもたらしてくれるのか。それは君たちの生活を一層楽しくするためにつねに役に立つものなのか。それとも、いつの日か愚かであったと気づかされるときがくるようなものなのか。あるいはまた、それは自らの職業生活をより勤勉に、より巧みに行なうことができるように、自己自身を一層有能にしてくれるものなのか。そしてその結果として、君たちを隣人のためにさらに役立つ立派な人間にしてくれるものなのか」、と。このように大人は若者に問いかけて考えさせる手だてを講じながら、彼らが善い趣味を持つことの本当の意義を理解できるように導いてやらなければならない。そのようなし方で繰り返し青年らと関わり合うことができるなら、若者は次第にすべての事柄をこうした思慮深さで判断する習慣を身につけるようになるのである。そんなときには、プラトンやクセノフォン(13)が書き残したソクラテスの対話編や、あるいはプロタルコス(14)の道徳書がたびたび若者と一緒に読まれるべきだろう。これらの著作を勧めるのはあまり現実的でない者たちには、青少年向けの入門書が別に作成されるのが望ましい。また、フェヌロン(15)の『死の対話』と彼が著した古代の賢者たちへの短い評論なども、大変役に立つことだろう。そして、それらは通常青年たちに読ませている最も上等な小説よりも格段に良いものなのである。

思春期の少女については、彼女らの道徳的趣味を育てるために、周りの人びとの配慮が特に必要となる。この年頃は虚栄心と感情的な興奮が彼女らをかなり強くとらえ始める時期であり、真にその完全な成長を願う立場からすれば、真面目に堅実な事柄に少女たちを取り組ませることが大切である。そしてこの年頃では自らの装いや虚栄心のために時間を少しでも浪費しないようにするために、特に注意が払われるべきである。人びとは彼女らに熱意をもって、一般に人間としての、そしてとりわけ女性としての真の本領がどうすれば発揮できるかについて語ってやり、さらにどれほど機知や礼儀正しさ、麗しさ、そして正しい身なりがそのために役立ちうるかを示さなければならない。だが、世の両親が今までのようにその師範役を果たすことができないとしたら、誰が彼女たちに適切にこれらのことを告げられるだろうか。これまで少女たちを家庭教師の指導に委ねた親は長らくなかったのであり、高等段階の学校へ行くことも一般には許されてこなかった。そんな現状において私が思いつくと言えば、これらの必要な知識を学ばせてくれる優れた書物が存在するなら、熱心にそれを読むのを勧めることであり、それ以上により適した助言を私は知らないのである。だが、その種の良書を探そうとすれば、まだきっと十分に見い

だせるはずである。例を挙げれば、『観客』『風俗の画家』『世界市民』『群像』等々、数多くの週刊道徳新聞がある。先ほど挙げた古代ギリシア・ローマの諸著作。ラシーヌ[16]、ボルテール、モリエール、デトゥーシュ[17]などのフランスの最良の演劇。ホルベルグ（ルズヴィ・ホルベア）[18]の諸作品。その他にも、各種の書簡。要するに、百冊もの優良な書物類が探せば見いだせるのである。たとえその方面に通じていないという人であっても、身近に助言を得るに適した人を求めようと思うなら、実際にたやすく見つけられるであろう。若い女子をそのような読み物の読書に取り組ませることは、分別ある振舞いを心得させたい父親であれば決して無関心ではいられないであろう。もしもそういう形で支援ができるなら、彼女らは小難しいことを言う人になるのでなく、分別があり、慎み深くて誠実な人になれるのである。われわれに委ねられた毎日の時間は、そう短いものではない。娘たちに無為に時間を過ごさせたくないならば、それに加えて家事や必要な仕事ができるように導けるなら、より十全と言えるだろう。

一般にわれわれが善い趣味を持つことの意義がどこにあるかと言えば、それはすべての事柄において目的へと最もたやすく人を導いてくれる、自然本来のものや純朴なものを、すべての技巧的で、筋が通らず、不自然なものよりも重視して、優先させる判断にその人が長けている点にある。若い人たちに善い道徳的趣味を与えるためには、この一般規則に準拠して対応していかなければならない。私がこの定めについてより詳しく説明しようと思えば、一冊の書物のほぼすべてをその叙述のために必要とするほどである。というのは、この規則全体はすこぶる多くの内容を含んでいるからである。だがこれ以上、話しを拡げることはまったく私の本意ではない。それゆえ、私はここではこれまでしてきたように、この命題をこと細かに詳述する代わりに、ただ事例を示して説明しておくにとどめておこう。他方でまた、趣味の悪さに関しても、それらを際立たせてくれる特徴を挙げておくとするなら、この一般規則から同様の説明ができると思われる。例えば、しばしば人の立ち居振舞いに現れるいろいろな気どりや思わせぶりな態度、あるいは多くの儀式的な行動様式、加えて交際や公衆での対人行動に伴う不必要なまでの慇懃さや媚びへつらい、これらのものはすべて人の趣味の悪さを表しているだろう。というのは、それはどれも不自然な見た目を人びとに印象づけるからであり、これらの性向と結びついた振舞いはその大半がひどく劣った無価値な結末しか招き寄せないからである。次の風刺文学上の挿話は、私のここでの趣意をはっきりとさせてくれると思われる。

ティティウス（Titius）という男はある公の職に携わっていたが、その職務の遂行は大した気苦労を要さず、そしてそれもほとんど重要とは見なされない代物で

あった。しかしながら、この御仁は物事に一段と大袈裟な装いを与えることによって、すべての彼の振舞いをひどくもったいぶって見せる術（すべ）を心得ていた。彼は職務上の気遣いが大変であるとか、眠る暇もないような大変な勤めであるとか、最大の注意を払って遂行しなければならない機密を扱っているなどと、さかんに吹聴していた。人が彼と話しを交わそうと思うなら、忙しいさなかに時間を割かせたせいで一・二度は謝る羽目になった。彼が働いているときは、焦眉の難題に取り組んでいる最中であるかのように振舞った。大事な秘密を抱えていると口にし、間もなくそれを人が知れば誰もが驚くだろうと言う。最後には、あれもこれも片付けなければならないので、もはやここに居られないと呟いて、急に正気づくのだった……。

こんな男に出くわしたなら、多くの者が「この人はお粗末な趣味の持ち主だ」、と思わず心の内を漏らしたくなるだろう。ところで、彼がこんな始末におえないありさまになったのは、彼が自然なもの、単純なものを侮蔑し、不自然なものや作為的なものを頑なに求めたからである。彼の胸中を塞いでいた想念とは、自分が重要人物だと思われたいという願望なのである。彼の職務の性質が重要度の高い内容を扱うことを許さないので、彼は仕事と本来的に関連のない事柄のなかに大切なものを探すほかなかったのである。彼が職務上の諸義務を厳格に果たすことができていたなら、彼の働きは自ずと重きを置かれたことだろう。だが、ティティウスは自分の職務のなかに本来果たすべきものを求めなかったので、本分とはまったく無関係な副次的な些事を自らの責務と取り違えてしまったのである。だから彼は単純明快な自然の道を離れ、作為的で見せかけの枝道に迷い込むという結末を招いてしまったわけなのである。

さて、ここで述べたこれらのことからきわめてはっきりしてくるのは、善い道徳的趣味の育成には、われわれが行なうべきすべての事柄に関わって、物事の自然性の理解がどうしても必要となるということである。一般に人はどんな事柄においても、その本質的な側面を単に副次的な部分から選り分けることや、根本的な問題を見かけ上の事象から区別することを心得ていなければならない。それができるなら、人はすべての事柄において自然本来のあり方を見定め、それに従って歩むことができるのである。それだから、われわれは相手の年齢を考慮に入れつつ、自然の道理の大切さを青年たちに教えていかなくてはならない。そのためには、自分の行なうことに対しても、また他人への判断や評価に対しても、若者には十分に注意を払わせるべきなのである。もしも青年たちの行動のなかに物事の本質から逸脱し、副次的な事柄にばかり楽しみを求めようとする傾向が見つかった場合には、直ちに誠実さと善い趣味をどれほど彼らが欠いているかを指摘してやらなければならな

い。彼らが単なるまやかしに過ぎないものとか、本来緊密に結びついている主成分から切り取られた残り滓とかに目を奪われ、ただ詰まらないだけのものを人に向かって褒め称えているのを見聞きした場合には、彼らの趣味がひどく劣ったものであることを伝えて注意してやらなければならない。優れた喜劇や風刺詩・風刺文学は、この点でとりわけ道徳的趣味の育成に大変役に立つものである。それゆえ、それらの諸作品にも若者を熱心に親しませるように促すことが必要なのである。

加えてまた、この年齢で特に気をつけておかなければならない第三の主要な留意点は、真の名誉の厳密な概念を若者らに与えることである。なぜならば、誤った名誉概念は大変多くの無内容で、程度の悪い状況へと彼らを誘い込むからである。「人間が名誉と名づけている事柄のなかで頑なに抱懐しているさまざまな諸概念が、人びとのすべての劣悪な行為の最も重要な原因なのである」(iii)。よく知られたフランス生まれの著作家〔マルキ・ダルジャン〕(19)がこのように言明したことは、それだから必ずしも間違ったことを述べているわけではないだろう。ただ、この指摘に関して言えば、男性が女性と比べて著しく異なるところがあるのも注意しておくべき点である。かと言って、他方では女性が男性的な過ちに陥ったり、逆にまた男性が女性的な弱点をさらけ出すこともある。それだから、私は両者を特に区別することなく、どちらの性をも念頭において論じるのがよいと考えている。ともあれ、これまでと同様、個別の立ち入った判断はそれぞれの読者の省察に委ねたい。

一定の外国の著作家は、ドイツの青少年が、ほぼおしなべてこの国民に特徴的な一般的欠点を有することに言及している。その指摘によると、彼らが大げさな振舞いを好み、ときにつかみ合い、殴り合い、飲んだくれるなどの行為によって、大騒ぎをする気風を持つというのである。そしてそれを彼らの名誉意識に着眼して論じている点で、この著者はまさに大きくは間違っていないと私には思われる。というのは、ドイツの若者の大部分がかつては確かにその類のことに名誉を求めていたからである。それを信じたくない者は、一番近くにある高等段階の学校へ行き、そこで学んでいる若者と知り合いになれば、このことについて直ちに納得させられるにちがいない。この国では普通の若者が自分を大いに自慢したいときには、彼らがいかに一団となってあちこちを歩き回ったか、いかにしたたかに大酒を飲んだか、いかに汚い言葉で侮辱された敵方と対決したか、等々のことをその口から聞かされるだろう。彼らは深酒に対して他人からたしなめられることさえ恥ずべきことと見なしており、その呆れる程度と言えば馬鹿者と罵る者がいれば相手を屈服させないで引き下がることも、決闘を回避して静かに自重して過ごす決断をすることも、いずれも彼らにとってひどく恥ずべきことと信じ込んでいるほどなのである。

スイスの青少年に関しても特にここで一言述べてよいなら、このドイツ的な欠点に加えてわがスイスの若者の場合、さらに別の難点を持っているように私には思われる。彼らは外国に出ると、自分の帰属階層が上流身分かどうかを気にし、貴族の出自で資産持ちであれば大いに自慢する傾向があると言ってよいだろう。わが母国においては普通の市民の息子と思われることや、質素に暮らすことを不面目だと感じる若者を見かけるのは決して稀ではない。従って、このような事例から、これらの若者が名誉をどこに求めているか、どのような理由でその種の貴族的暮らしを望んでいるかが容易に分かるのである。それだから、彼らから名誉に関するそのような間違った観念を拭い去り、逆に本当の名誉はただ人間の真の称揚すべき働きに基づくことを彼らに示すことがぜひとも必要なのである。功労と名誉に関する世間一般の偏見に追従しなくても不名誉なことではなく、逆にそれに不同意の方が人の名誉に適うこともありうるのだ、と伝えてやらなければならない。そしてまた、名誉は人の身分とも物質的豊かさとも無関係なものであり、自然性や理性と対立する事柄にそれを求めようとしても徒労に帰すだけなのだと伝えなければならない。真の高貴さの本質とは、気高い心情によって、また有益な物事の習得によって、そして誰にもよく分かる実効性ある行為によって、多くの凡庸な群衆から抜け出して自己を高めようとする人のあり方にこそ認めうるのだ、と重ねて伝えてやらなければならない。彼ら青少年には、下層の出身で貧しかったにもかかわらず、自らの功績によって無数の庶民の中から這い上がり、気高く高貴な身分となった人物の事例を紹介してみせなければならない。真の名誉を求める妨げとなる誤った内気さに上手に打ち勝つ対処法を示してやることによって、児童期からこうした弱点を彼らが早々と克服していけるように促さなければならないのである。このことは、確かに教育の重要な一課題であり、それだから私は子どもと関わりのあるすべての人びとに、とりわけ誤った羞恥心を主題としたプルタルコスの作品を読むことを勧めたいと思う[iv]。一般に子どもに認められるこうした弱点にどのように立ち向かえばよいかを、人はそこから学ぶことができるのである。〔次はプルタルコスからの挿話である。〕

若い頃のテミストクレスはダンスができないことや、フルートを演奏することができないために、幾らか気品の趣（おもむき）に欠けると非難されたとき、彼は気位を高く保ち、怯むことなく次の言葉を返した。「そのような些細なことができないからといってあなたがたは私を蔑むが、弱小の小都市の統治を私に委ねさせてみ給え。そうすれば、私がそれを大きくて強く、そして豊かな都市に変貌させるのをあなたがたは目撃することになるだろう」。こんな事例をこそ、若者には紹介すべきなのである。

このようにして物語を活用すれば、子どもらは未熟な内気を克服し、価値の希薄なものを軽蔑して、本当に立派で有益な事柄に習熟することに真の名誉への本来的通路があると学び知るようになる。それだから、名誉の真正の観念が彼らの心のなかに根づき、誤った柔弱さが駆逐されるのを見とどけるまで、若い人たちを安易に外国に旅立たせるべきではないのである。ドイツの若者の場合、過度の飲酒を戒める美食家に腹を立て赤っ恥をかいたり、どこかの馬鹿者を蔑んで決闘を申し込まれて体面を傷つけられたりしているというのだから、どれほど多くの青年が外国で自らの命を縮めていることだろうか。これとても、ほんの僅かな例示を挙げたに過ぎないのであるが……。

一方で、一般に世の女性が名誉について抱く観念も、それほど良いものではなく、そのためとても多くの愚行へと導かれ、さらに男性に輪をかけて間違った恥意識に惑わされている状況がある。私の観察に誤りがなければ、若い娘たちは一般にその年頃に特有の名誉の観念に触発され、虚栄に駆られて女教師に向かって張り合おうとする傾向がある。女教師と同等の権利を持つと錯覚をしている彼女らにとって、相手よりも粗末な装いをしていたり、より低い身分であったりすることはとりわけ恥辱的に映るのである。別の一例を挙げると、公的な場、あるいは私的な仲間の前で姿を見せて、賞賛されずに終わったときに彼女たちがひどく悲しむのは、それが自分にとって不名誉と感じられてしまうからである。実際のところ、自らの持てる魅力を総動員して自分の出自以上に高貴な身分へと伸し上がりたいと願っている女性に出会うことは稀ではない。大体において若い娘たちはこうした俗世的世界に名誉を求めているのである。そしてそのような心根が彼女らを惑わせばどういう結果になるかは、誰もが知っている周知の事柄である。それゆえに、人が娘たちに真の名誉の誠実な観念を身につけさせることは、きわめて必要なことなのである。シャフツベリー[20]の言葉に拠れば、「人間の善い心情や高貴な自然本性は、この世の他のすべての素晴らしいもの以上に美質と魅力を有しており、人の内に宿る真の名誉の種子と、天賦の高潔さは、すべての外面的な虚飾や財産、もしくは外形的な位階序列より、比べようもなく大きな固有の真価を有するものなのである」[v]。この一文の持つ趣意をわれわれは彼女たちにしっかりと伝えなければならないであろう。

身分も富も、豪勢華美なものも、たとえそれらが一身に備わっていたとしても、人間の称揚すべき真の働きには少しも寄与しないことを、子どものときに若い彼女たちに理解させることは、そう難しくはないだろうと思われる。また、初めて彼女たちを世間の人びとのなかに導き入れるときには、これらの外的事情は決して人生の幸福を決定づけはしないのだということを教えておかなければならない。そし

て、世間の観察を通してそのことに気づかせる機会をたびたび得させ、これらの問題についてじっくりと内省を加えさせなければならない。このような落ち着いた熟考がどうしても欠かせない理由は、そうしなければ子どもの時期の悪い性向は決して取り除かれないからである。学問、とりわけ有用な哲学的知恵は、心情を落ち着かせる手立てとなるものであり、それによって悪い傾向性を完全には排除できないにしても、理性の支配によって統御しつつ無害化してくれる貴重な手段となるにちがいないのである。それゆえ、ここで再度想起しておきたいのは、彼女らがある程度成長を遂げている場合には、若い女子に悟性による分別能力を備えさせるために諸学・教科の手ほどきを行ない、その精神にいつも知的な活動を引き受けさせておくようにするのがよいということである。重ねて言うまでもないが、私は彼女たちを物知りにしたいわけではないし、それ以上にまた学を衒（てら）う人間にすることを望んでいるわけでもない。というのも、人をそのようにすることが学問の成就したい目的ではないからである。彼女たちは哲学、倫理、そして歴史を学ぶことによって気高い心情を培い、そしてわが身の判断から偏見を洗い流してくれる悟性を獲得すべきなのである。そうやって、必ずしも博識は望めないにしても多くの真実が網羅されている良書に熱心に親しむようになれば、彼女たちも確実に悟性的判断力を身につけられるようになるにちがいないのである。私はこの件に関して、本来ならここでさらなる考察と注釈を加えるべきところであろう（この点は今日非常に要請されている課題であるものの、ごくわずかな両親にしかその重要性が理解されていないのである）。ただ、私は別のところでこの主題を論じる予定でいるので、ここでは詳しくこの問題に踏み込むことはしないでおくことにしよう[21]。

最後に、若い人たちの外国旅行に関する私の所見を述べてこの章を閉じることにしたい。この種の旅行を私は必ず必要なものとは思わないが、大変重要なものとは考えており、資産の余裕のあるすべての両親には、自分の子息を諸外国への旅に出すことを勧めておきたい。だが、この話題に関する必要な知識の入手は他でも得られるだろうから、これに関してはごく簡単な説明にとどめておこう。私が最初に述べておきたいのは次のことである。

まだ若い青年たちを旅行に送り出すのは、彼らが国内に住み、自分と密接に関わりのある社会を全体的にかなりよく知るようになるまでは、行なわないでおくことである。旅行の主要な目的の一つは、広く世界の様子を身をもって知るようになることである。ところが、そういう目的でなくて生活の拠点を外国に移すことに旅の動機を求めるのなら、それはきわめて短慮と言うべきであり、何よりも自分自身の母国に若者はそれを求めるべきである。彼らはいまだ両親と教師の監督のもとに置

かれているのだから、そこにとどまってこそこれらの知識の最初の基礎を習得することができるのである。

第一には、若者たちは自分の祖国の自然的特性、政府の仕組み、機構・制度の諸原則、そして人びとの生活様式などに対して、その短所や長所を含めてよく通じていなければならない。そうした事柄を注意深く観察しうる趣味判断を、最初にまず彼らが培えるようにしておく必要がある。そうしておけば、遅きに失する心配の必要もなく、後になって外国に行ったとしても彼らはすべての必要なことを注意して見聞きすることができるのである。鳥の巣立ちを喩えにして言えば、自分が生まれ育った樹の梢で幼鳥が最初の羽ばたきを試すように、若者もそれと同様に、最初は自分の生まれた土地で旅のし方や、旅行を有益なものにする術を習わなければならない。若鳥なら手始めにまず、巣から一番近くの樹枝へと飛び移り、それから元の枝へと戻ってくる。次にまた、そこから少し離れた太枝へと移り、十分羽ばたく練習をしてからさらに別の樹へと飛び、いよいよそこを離れて他の場所に向かって飛んでいくのである。若い旅人も、このようにして順序を踏みながら、旅への備えをしなければならないのである。

第二に、若者たちがあまりに早く旅に出て大人の監督下から自由になることに対しては、また細心の注意が払われなければならない。というのは、有能な家庭教師を子息らの旅に同行させることは、すべての両親に望めることではないからである。若者が適切な教育を受けてしっかりと自分ができあがるその前に、むやみに早く大人の監督から解き放たれて好き放題にさせられるとしたら、予想しえないほどの堕落にさらされる危険を招くだろう。そんな状態に置かれてもすっかり駄目にならず、再び家にたどり着ける青年がいるとするなら、それは非常に幸運と言うべきなのである。青年期の最初の熱情の高まりは、きわめて多くの放埒行為を招きやすい。そこに障壁となる歯止めがないのであれば、若者は自らの衝動に従うだけとなる。そのようにして、外国の地で志した習得を怠るだけでなく、抑制の効かない怠惰な生活に堕してしまうとしたら、予想されるのは旅立ったときより十倍も悪くなって父の家に舞い戻ってくる姿であり、その場合には旅に出ない方がはるかにましであったということになるだけである。それだから、わが家での若者の生活の様子を観察し、健全に成熟を遂げた落ち着きのある心情を認めうるまでは、若者を一人で旅立ちさせることを考えてはならないのである。人間の称揚すべき真の働きをどこに見いだせばよいかを十分認識し、それを自らの目標として努力できるようになるまで、そしてそのために自らの性向を統制することがほぼできるように成長するまで、わが子を一人で旅立ちさせてはいけないのである。二十歳以前の年齢だと、

若者を好きなように放置するやり方は、たとえ彼がとても良好に育っていても私は敢えて行わないであろう。彼は家にいて善良な性質を盤石で揺らぎのないものにするまで、必要な時間をそこで費やさなければならない。それをしないで、いったい誰が危険な道、通行もできない荒地、多くの川や湖に阻まれたところへ、つまり遠隔の外国へと子どもを一人好んで追いやるというのだろうか？ 道に迷ったり、身の危険を招く恐れがあるというのに、その程度の不安なら差し障りはないと言って、あなたがたは親として引き留める決断を下さない方を選ぶのだろうか？　さらに加えて、旅は道徳的な次元で考量する場合には、もっとずっと危険の多いものとなる。従って、世の旅人が常々心配をする陸の悪路や海の岩礁を見分けられるようになるまで――〔この常套句を思春期の彼らに一層適した言葉で言い換えるなら〕青春の時期の素行不良や頽落的生活へ堕ちる危険性を十分に識別できるようになるまで――人びとは青年たちを旅へと追いやるべきではないのである。

さまざまな階層を含む家の親が、自分の息子たちの旅に賢明で経験豊かな男性を一人、ガイド兼見守り役として付き添わせる形で送り出すことができれば、それが一番望ましい外国旅行の姿であるだろう。このような対応が可能なら、彼らの旅行は大きな実益をもたらすだけでなく、旅の出費をずっと少なくする効果をも引き出すことになる。というのは、その種のガイドであれば利口で控え目なやり繰りをし、若者の陥りがちな無用な出費を抑えてくれるはずであり、雇いの俸給の抑制だけでなく、他にもたぶん多くの節約を可能にしてくれるはずだからである。最後にここで述べた所感は、決して奇を衒（てら）うものでない真っ当な助言と思われるので、これに対する異論は少しも生じないものとしておきたい。

**〔原注（第８章）〕**

（ⅱ）私はこの箇所ではルキアノスLucianos（既出、Ⅲ（7））を各読者には繙いてもらいたいし、そこでソロンSolonとアナカルシスAnacharsisとの対話をじっくりと読んでもらうように望みたい。〔ソロン（紀元前639年頃-559年頃、政治家・立法者で詩人）は、アテナイの政治、経済、道徳を刷新するための法制を定めた改革によって知られる。アナカルシスは前６世紀頃のスキシア皇子で哲学者。ルキアノスの著名な代表作に『神々の対話』『死者の対話』などがあり、身体訓練に関するアナカルシスの見解は、邦訳書では『ルキアノス選集』内田次信訳（国文社、1999年）で読むことができる。〕

（ⅲ）マルキ・ダルジャンMarquis d'Argens著『哲学的夢想』（Songes philosophiques par l'auteur des Lettres Juives, Berlin 1748, p.160.）。

（ⅳ）この優れたギリシアの哲人の道徳的著作をドイツの学識ある人びとがこれまで母国語に翻訳する努力を尽くしてこなかったことは、実際に惜しむべきことである。敢えて付言するのを許してもらえば、古代の最も優れたこうした遺産をドイツ人が高く評価していないということは、この国がいまだ超克しえていない後進性の確かな証左であると私は思うのである。

（ｖ）シャフツベリー著『人間、慣習、世論および時代の諸特質』、1711年（Schaftsbury Miscellaneous Reflexions.）。

〔訳注（第８章）〕

（８）ロックは水難から守ることができ、健康の増進にも非常に役立つとして、子どもが水泳を習うことの意義を大いに強調している。特にローマ人は水泳を文学と同格に扱うほどに重要視し、読むことも泳ぐことも習わなかった者を、「文字も読めず、泳ぎもできず」と言い慣わしていたと指摘している（ロック著、服部知文訳『教育に関する考察』岩波書店、1967年、22頁参照）。

（９）チューリヒに近いクノナウの詩人・画家であるマイアー（Johann Ludwig Meyer, 1705-1785年）を指す。ボードマーが推薦の前書きを寄せて公刊されたマイヤーの主著が『五十の新寓話』である。W.クリンケの注解（*Johann Georg Sulzers pädagagogische Schriften*, hrsg. von Klinke, W., 1922, S.149.）によると、この寓話本は1744年になって初版が公刊され、さらに「追補」と８作品を補充して1754年、1757年の版がそれに続いた。1757年版では58枚の銅板画が紙面を飾り、1773年までに６つの版を重ねた。

（10）ベン・シラ（Ben Sira, 紀元前３世紀-前２世紀）はエルサレムのユダヤ人書記官であり、『シラ書』を著した。彼の箴言の書は、東方正教会や英国国教会において正典や外典の一部として受け入れられた。その箴言集は神の栄光を称える内容と祈りのほか、徳や不徳、日常生活の知恵や忠告を豊富に含んでいる。

（11）W.クリンケ校閲の翻刻版では、この段落の最後に置かれた一センテンスは、直後の表現に重複が見られるため省略された（この箇所の段落の追加は訳者による）。

（12）ハラー（Albrecht von Haller, 1708-1777年）はスイスの医学者・植物学者で詩人。チュービンゲン大学に学び、1736年に新設されたゲッティンゲン大学教授に招聘され、緻密な探究力により新理論を構築して脚光を浴びた。ズルツァーの本書執筆時には、スイスで最も尊敬を集めていた学者の一人であった。

（13）クセノフォンは既出、Ⅰ（9）。彼のソクラテス言行録として『ソークラテースの思い出』佐々木理訳（岩波書店、1953年）がある。

（14）プルタルコスは既出、Ⅰ（14）、Ⅲ（2）。道徳書と評されるものとしては『倫理論集（モラリア）』が知られている。その作品の一部を収めた邦訳文献に、プルタルコス『饒舌について・他五篇』柳沼重剛訳（岩波書店、1985年）、『似て非なる友について・他三篇』柳沼重剛訳（岩波書店、1988年）がある。

（15）フェヌロンは既出、Ⅲ（3）。著者がここで青少年向けに推奨した書は『死者との対話』1712年、『内面生活に関する聖人たちの格言の解説』1697年である。邦訳文献に『テレマックの冒険（上・下 ）』朝倉剛訳（現代思潮社、1969年）が出版されている。

（16）ラシーヌ（Jean Racine, 1639-1699年）はルイ14世の時代に、フランス古典悲劇を完成した劇作家。優れた心理分析を駆使した巧みな構想により、代表作『アンドロマック』『ブリタニキュス』などを書いた。

（17）デトゥーシュ（André Cardinal Destouches, 1672-1749年）は17世紀から始まるバロック音楽を代表する作曲家。ルイ14世・15世の治世にフランス宮廷の庇護を受けた。英雄的歌劇『イセ』で名が知られた。

（18）既出、Ⅳ（3）。ホルベルグ（ルズヴィ・ホルベア）の喜劇は、1722年から1754年にかけて多数演じられた。小説に『ニルス・クリムの地下世界への旅』1742年、詩に『変態または変身』1726年、他がある。

（19）マルキ・ダルジャン（1704-1771年）は、フランス生まれの著述家であるが、プロイセン

王国に招聘されて1744年からベルリン科学アカデミーの哲学部長を務めた。彼の評論の主要な特色は快・不快の原理を啓蒙の合理哲学の基礎に据えようとしたところにあるとされる。マルキ・ダルジャン著『テレーズの告白』が読み物として知られている。邦訳文献に『テレーズの告白』三宅一郎訳（番町書房、1973年）がある。

（20）第三代シャフツベリー伯 （Anthony Ashley Cooper, Graf von Shaftesbury, 1671-1713年）はイギリスの道徳哲学者。ギリシアおよびローマの古典に通じ、人間本性の二重性を統合する道徳説と、善美の調和のとれた楽天的な世界観を説く特有の思想はハチスン、バトラーらの道徳感覚派の哲学系譜を準備する下地となった。その後、ライプニッツを経由してドイツ語圏の精神世界にも影響を及ぼし、啓蒙都市チューリヒで学んだズルツァーはシャフツベリーから多くの学問的刺激を受けとっている。

（21）本書『あとがき』（Nacherinnerung, S.284.）によると、ズルツァーはこの『試論』で究明した教育・教授思想に基づいて、児童期以降の少年少女を対象とした公的学校（私学民営を排除しない）が子どもの教育のために不可欠とする信念を強め、本書の最終部に特別に章を設けるか、もしくは別の論著を書き起こして、今後広く普及を図るべき学校の編成と内容について、彼の構想の大要をまとめて提案する意思を固めていた。本注記のこの箇所では、その構想の一角を占めるはずの女子のための学校教育と読書学習に触れ、それがこれからの女児・少女の知的、道徳的育成に資するであろうことを指摘している。だが、「別のところでこの主題を論じる予定」と抱負が語られた著述計画であったが、第９章まで書きすすめたところで本書は終結を迎え、この段階での試案の公表にはいたらなかった。頓挫を生じさせた理由には、彼が宮廷内教会説教師ザックを介してプロイセン中央政府に教育職への就任を願い出た結果、本書脱稿前後にはベルリン訪問などにより繁忙を極めていたことが、主要な妨げになったと推察される。

原典：J.G.Sulzer, *Versuch von der Erziehung und Unterweisung der Kinder*, zweite, stark vermehrte Auflage, Conrad Orell und Comp, Zürich 1748.（Kapitel 8, S.221-271.）